

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学	分 野	医療福祉経営学
学籍番号	17S3027	院生氏名	後藤隆太郎
通学キャンパス	赤坂キャンパス		
論 文 題 目	リハビリテーション臨床評価指標の因子構造比較研究 ～運動能力指標としての基本動作指標（BMS）と機能的自立度評価法（FIM）の妥当性について～		
審査結果（枠で囲む）	<div>合格</div> 不合格		
<p>&lt;審査結果の要旨&gt;</p> <p>1. 主論文について：早期理学療法から利用できる理学療法の効果判定指標として、基本動作指標（ Basic movement scale ; BMS ）が開発され、理学療法分野での普及が進められている。BMS についての先行研究において、指標の信頼性や妥当性を明らかにし、臨床での使用が可能であることを示すことが主たる目的であった。今後は、理学療法における指標が必要に関する検証に対してより多くの早期理学療法場面の患者を対象に分析を進める必要があると考え、探索的因子分析により明らかにすることを本論文の目的とした。論文提出者は、大腿骨頸部骨折症例および脳卒中症例を対象に BMS および FIM の評価を分析対象に進めた。本論文結果より因子分析を中心に項目の関係性を明らかにした結果、BMS は患者自身の基本動作能力を示す 1 次元構造の指標であったが、 FIM 運動項目は入院中の安全管理上の制限や転倒予防のための過介助が存在し本人の身体能力以外の要素も含んだ多次元構造を有する指標であることが示唆された。患者の将来的な能力改善のためには現状の最大能力と実行状況の把握が重要であり、患者の実行状況を把握する FIM 運動項目とともに患者の能力の評価を行う BMS による基本動作能力の測定指標を併用することが有用であることを提言しており、評価指標の研究として高く評価できると考える。</p> <p>2. 審査会は令和元年 11 月 21 日に開催し、初回審査では目的と結論の整合性、論文書式の体裁、本論文で着目した各指標と操作定義の説明、因子分析の解釈などについて論文の修正を求めた。12 月 26 日に実施した 2 回目の審査および翌年令和 2 年 1 月 6 日に再提出された論文で適切に修正され、論文の論証、体裁の修正も的確であったことを書類審査で確認した。</p> <p>3. 各審査での口頭試問でも適切な回答であり、結果の解釈も修正論文にて的確に答え、いずれにおいても指摘された内容において真摯に対応し適切な応答であった。</p> <p>4. 以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（保健医療学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	主 査 金子 純一郎		
	副 査 小川 俊夫		
	副 査 西田 裕介		